

●書学書道史学会

## 会 報

第 13 号

平成19年(2007)6月1日発行

編集・発行

書学書道史学会  
会報委員会

東京都渋谷区桜丘町29-35

〒150-0031 美術新聞社内

TEL(03)3462-5251(代)

FAX(03)3464-8521(代)

## 文化の架橋

萱 のり子

書法文化のおひざもと、中国での書への関心は今日必ずしも高くはない。文学や書法の専門家は別にして、若者の意識は経済発展へと向けられる傾向にあり、伝統文化に対する共通理解も薄らいでいる。状況は日本においてもさほど変わりはないだろう。過去の遺産を受け継ぎながら新しい現象に目を向けるべきほどの分野でも同じだが、こと書学書道史に関しては、避けては通れない課題である。

昨年7月に安田女子大学で開催された第5回書法文化書法教育国際会議は、東アジア在住の研究者・実践家の枠を超えて、書の今後の可能性を探る大きな研究交流の機会になった。グローバル化が文化研究の一つの柱となっている昨今、書の分野においてもこのテーマが議論されたことには、大きな意義がある。異なる民族の多様な文化は、どのようにして理解できるのだろうか。唯一の解答などないこの問いに、多視点からこたえようとする機会が今年も用意されている。筆者の研究分野との関連で紹介してみたい。

本年7月に「文化架橋の美学 (Aesthetics Bridging Cultures)」をテーマにした第17回国際美学学会がトルコのアンカラで開催される。

芸術文化や民族固有の感性をどのようにして共有できるのか、芸術諸現象をめぐって議論する主旨である。美学は西洋で成立した学問であるために、当学会の開催地も西洋に偏りがちであったが、近年は、研究対象や視点交流の必要性から、世界各地で開かれるようになった。前回6年前にはアジア圏で初めて日本が当番国となって千葉で開催され、前回3年前にはブラジルのリオデジャネイロで開催された。研究分野の最新情報が聴取できるだけでなく、開催地ならではの文化や時事にふれることができるのは、国際学会の醍醐味である。日本で開かれた折にも、アジアの民族芸術や芸能が披露され、アジアの中の日本を検証するシンポジウムが用意された。今回の開催国トルコは、文化的にも地理的にも東と西をつなぐところに位置している。ここから東ではどのように文明が拓かれ、あるいは伝えられ、宗教や自然環境と融合した独自の文化が発展してきたのだろうか。また、トルコから西、ヨーロッパとの影響関係はどうだったのだろうか。これらのことを現代の視点から改めて問い直してみようという発信である。

このような大枠から、研究発表のセッションとは別にパネルディスカッションが複数企画されている。その項目には、芸術と政治、新しいメディアの美学、写真、建築と都市性、地中海の相互文化と創造、環境・風景・美学、言語・筆跡・書法がある。異文化の交流や理解には、訳語の選定が不可避である。“Language, Script, Calligraphy”という語と「言語・筆跡・書法」(筆者訳)という語とでは、内容やイメージにかなりの差があるだろう。語の示す範囲や意味の差異をめぐる議論は、当席上での関心と呼ぶと思われる。「書かれたもの」への関心が、異文化間ではおのおのどのように熟しているかを観察できるからである。筆者もこのパネルに参加を予定している。機会が許せば、事後の報告をしてみたい。

## 第18回書学書道史学会大会のご案内

## 事務局

第18回書学書道史学会大会は、筑波大学において以下の日程で開催されます。詳細は、月上旬に会員各位に配布予定の「研究発表レジュメ集」とともに「最終案内」としてお知らせする予定ですが、現在までに固まっている大要は以下のとおりです。

○理事会 十一月十六日(金)午後四時三十分から、ホテルオークラつくばにて。

○大会 十一月十七日(土)午前九時、筑波大学総合研究棟DⅡ写真Ⅱにて受付開始。九時三十分から総会、十時三十分から研究発表およびシンポジウムに関する基調講演、午後五時終了予定。今大会も前年度同様、分科会を設けません。(発表件数の関係で十八日にも研究発表を設定する場合があります)

○懇親会 十一月十七日(土)午後六時半から、ホテルオークラつくばにて開催予定。

○シンポジウム 十一月十八日(日)午前十時から(予定)筑波大学総合研究棟Dにて。「書学における用語の問題(仮題)」をテーマに開催予定。

○大会会場への交通 ①つくばエクスプレス線(「秋葉原」始発)



を利用の場合、「つくば」行にて終点下車。「つくば」駅地上バスターミナル「つくばセンター」から関東鉄道バス「筑波大学中央」行もしくは「筑波大学循環(右回り)」行にて「筑波大学西」下車。②JR東京駅八重洲南口より高速バスを利用の場合、「つくばセンター」行にて終点下車。「つくばセンター」から関東鉄道バス「筑波大学中央」行もしくは「筑波大学循環(右回り)」行にて「筑波大学西」下車。③JR常磐線「土浦」「荒川沖」「ひたち野うしく」駅よりバスを利用の場合、各駅バスターミナルより関東鉄道バス「筑波大学中央」行にて「筑波大学西」下車。(「つくばセンター」から大会会場までは、タクシーで5分程度です)

○宿泊用のホテルは各自で手配をお願いします。

○理事・監事・幹事各位については、理事会および準備会等の関係上、事務局にて十一月十六、十七の両日(泊)、「エポカルつくば」(ホテルオークラ別館)にシングル・ルームを確保しております。ご希望の方は事務局にお申込みください。

## 第3回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー」開催報告

平成19年2月11日(日)、淑徳大学書学文化センターにおいて、午後2時より2時間にわたって、第3回「書学書道史学会会員のための特別鑑賞セミナー」が開催された。

参加者数がこれまでを下回ったことは、残念ではあったが、同大学の小川博章助教授による総合的解説、ついで個々の陳列品の丁寧な解説がなされ、その後に参加者個々人が存分に鑑賞する時間をえて、有意義なセミナーとなった。

鑑賞に供された拓の多くは整本で、新・旧拓を對比する展示や、話題の新出土「井真成墓誌」や顔真卿「王琳墓誌」、また珍しい藍拓・緑拓を含む、多種多様な内容であった。当日展示された拓本は以下のとおりである。(国内局)

## 〈鑑賞拓本リスト〉

- ① 毛公鼎 西周
- ② 散氏盤 西周
- ③ 権量銘 秦
- ④ 瑯邪台刻石 秦
- ⑤ 鹿孝禹刻石 前漢
- ⑥ 開通褒斜道刻石 後漢

## 2007年度・第18回大会研究発表募集要項

今秋の第18回書学書道史学会大会は、筑波大学において別項のとおり開催されます。発表会場は前年度同様に1室とし、分科会を設けません。なお、2日目は慣例の鑑賞行事に代えて、シンポジウム「書学における用語の問題(仮題)」が開催される予定です。つくばエクスプレス線の開通により、所要時間が大幅に短縮され、東京から至近の会場となりました。ぜひ、奮って研究発表をお申込みください。

### 記

- 1) 日時：平成19年11月17日(土)／(発表件数の関係で18日にも研究発表を設定する場合があります)
- 2) 発表時間：各30分(質疑応答10分を含む)／従来の40分(質疑応答同)から変更されました。ご注意ください。
- 3) 申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、800字程度のレジユメを添えて提出してください。
- 4) レジユメの形式：原則としてワープロで作成し、テキスト形式でフロッピーディスクに保存して、印字出力した別紙と合せて提出してください。メール送信も受け付けます。その場合は、印字出力したものを合せてFAX送信してください。
- 5) 発表申込締切：平成19年7月10日(火)＝必着＝
- 6) 発表者の決定と通知：大会での発表者は、学会理事会で決定し、結果を個別にお知らせします。
- 7) 「レジユメ集」の配布：大会発表者の「レジユメ集」は、10月上旬に大会日程とともに全会員に配布します。

※大会での発表については、学会誌『書学書道史研究』第18号(平成20年秋刊)への論文投稿申込みがあったものとして扱われます。改めて学会誌への投稿申込みをする必要はありません。

※発表者の論文原稿の締切りは、平成20年3月末日です。原稿の採否は査読委員会で決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集局まで文書でお問合せください。

※大会発表申込書とレジユメ(フロッピーディスク・印字添付)は、封筒に「発表申込・レジユメ在中」と明記して、下記宛にお送りください。不着事故をさけるため、配達記録郵便または宅配便をご利用ください。

〈送り先〉〒150-0031東京都渋谷区桜丘町29-35 ヴィラ桜ヶ丘ビル7F

Tel 03-3462-5251 Fax 03-3464-8521

書学書道史学会国内局・大会運営委員会 宛

- |    |       |   |    |      |   |    |      |   |    |       |   |    |      |   |    |      |   |    |       |   |    |       |   |    |        |   |    |         |   |    |        |    |    |      |    |    |               |    |    |      |   |    |       |   |    |     |   |    |     |    |    |      |    |    |     |    |    |      |    |    |     |    |    |     |    |    |     |    |    |          |    |    |          |    |   |         |    |   |         |    |   |         |    |
|----|-------|---|----|------|---|----|------|---|----|-------|---|----|------|---|----|------|---|----|-------|---|----|-------|---|----|--------|---|----|---------|---|----|--------|----|----|------|----|----|---------------|----|----|------|---|----|-------|---|----|-----|---|----|-----|----|----|------|----|----|-----|----|----|------|----|----|-----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|----------|----|----|----------|----|---|---------|----|---|---------|----|---|---------|----|
| 34 | 顔氏家廟碑 | 唐 | 33 | 争坐位帖 | 唐 | 32 | 多宝塔碑 | 唐 | 31 | 郭虚己墓誌 | 唐 | 30 | 徐僑墓誌 | 唐 | 29 | 王琳墓誌 | 唐 | 28 | 井真成墓誌 | 唐 | 27 | 景龍觀鐘銘 | 唐 | 26 | 宋伏護造像記 | 唐 | 25 | 鳳泉寺舍利塔銘 | 隋 | 24 | 鄭述祖修廟碑 | 北齊 | 23 | 張猛龍碑 | 北魏 | 22 | 龍門二十品(始平公造像記) | 北魏 | 21 | 爨龍顏碑 | 宋 | 20 | 楊紹買地券 | 晋 | 19 | 画像碑 | 漢 | 18 | 曹全碑 | 後漢 | 17 | 楊淮表記 | 後漢 | 16 | 西狹頌 | 後漢 | 15 | 史晨前碑 | 後漢 | 14 | 礼器碑 | 後漢 | 13 | 乙瑛碑 | 後漢 | 12 | 石門頌 | 後漢 | 11 | 嵩山太室石闕後銘 | 後漢 | 10 | 嵩山開母廟石闕銘 | 後漢 | 9 | 嵩山少室石闕銘 | 後漢 | 8 | 嵩山太室石闕銘 | 後漢 | 7 | 陽三老石室題記 | 後漢 |
|----|-------|---|----|------|---|----|------|---|----|-------|---|----|------|---|----|------|---|----|-------|---|----|-------|---|----|--------|---|----|---------|---|----|--------|----|----|------|----|----|---------------|----|----|------|---|----|-------|---|----|-----|---|----|-----|----|----|------|----|----|-----|----|----|------|----|----|-----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|----------|----|----|----------|----|---|---------|----|---|---------|----|---|---------|----|

〈研究余話〉

### 削除・改刻された甲骨文字

浦野 俊則

甲骨文字資料は、多量にあるが、その一部に、既存の文字を削除し、その上に別の文字を刻したものがあつた。その事例を紹介し、その意味を考へる。

【例一】中国国家博物館蔵大字骨（『殷墟書契精華』）『中国国家博物館蔵法書大観』所収



図1

図1は、諸書に見える著名なものであるが、この刻字の中央部分を拡大すると、現存文字の下に別の文字が刻されていたことが分かる。

図2は、「若」字の部分で、この文字と重なって、細い線が見える。画像を拡大すると、刻してあることが分かる。

図2

図3は、細い刻線を太く書き起こしたものである。「亦」起（また、あり）の二字である。

図3

このように復元すると、この行には、「乃茲亦」土希若」と刻してあつたことが分かる。「若」

以降にも刻してあつたようだが、文字として読めるものはない。他の行にも削除痕と見られるものがあるが、文字として読めるものがない。

この例では、削除された文字が、現存の文字と同じ大きさで同様の内容であつたことが分かる。なぜこのようなことが行われたのか、理由は分からない。

【例二】台北・中央研究院蔵龜甲（『殷墟文字丙編』一）

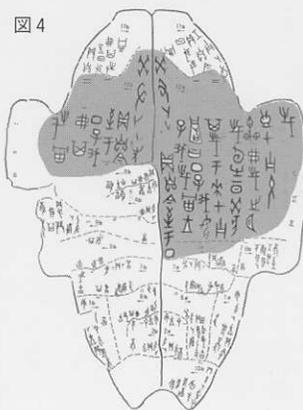


図4

図4は、『丙編』に削除痕のある文字を指摘してある。それは、図のグレー表示の範囲である。この範囲内に大きな文字が刻されている。この文字を刻すために既存の文字を削除したものと考へられる。

例一と例二は、ともに特別大きな文字で刻してあるものである。特に大事なものという意味が込められているのかもしれない。他の大字甲骨にも削除痕があるようだが、詳細は未検討である。

【例三】花園莊東地甲骨

一九九一年に殷墟花園莊東のH3坑から甲骨一五八三片が出土した。整理して発表されたもの五六二版。そのうち一二九版に文字の削除痕があつた。これまでにない多さである。文中の一〇二の文字を削除している例が多い。削除痕の上に再刻したものは数例しかない。文字が特段大きいわけではなく、削除理由は前例とは異なる。

例一と例二は、甲骨文字の臨書資料として、しばしば利用されているものである。ことにも留意しておく必要がある。

### 第3回研究発表会開催のお知らせ

国内局

研究発表会は第1回、第2回とも50人ほどが集う盛会となっております。本年度の第3回も東京・板橋区の大東文化大学において、下記のとおり開催されることになりました。奮ってご参加ください。

日時…9月24日(月・祝)

12…30 受付開始

13…00 開会

16…00 終了(予定)

場所…大東文化大学・板橋キャンパス

(東武東上線「東武練馬」駅下車、または都営三田線「西台」駅下車)

#### 〈研究発表〉

##### 1 伝西行筆「山家心中集」書誌一考

國學院大學大学院博士後期課程 家入博徳  
今日三人の筆者の寄合書、および俊成の四人によって書写されている伝西行筆「山家心中集」(宮本家藏)は、その寄合書が無秩序な書写であるとされている。しかし、今日我々が考えているような規則的な分担がなされた書写ではないにしても、何かしらの条件から書写箇所が設定されていると考えるに至った。そこで、今般、この「山家心中集」の書誌について改めて考察してみたいと思う。

##### 2 王澍の書論にみる唐楷観

筑波大学大学院博士後期課程 高橋佑太  
王澍(1668-1739)は清朝初期における碑帖兼習を代表する書人の一人で、考証や鑑

別に精しいことでも知られる。「竹雲題跋」や「虚舟題跋」をはじめとして多くの著述を残しているが、これら王澍の著述の内容に関する研究は数少なく、その書法観は必ずしも明らかとはなっていない。そこで本発表では唐楷に焦点をあて、それらに対する評語の検討を通して、王澍の書法観の一端を考察するとともに、その書論史的な位置についても検討を加えたい。

##### 3 日本における王羲之書法の受容と展開

空海筆「風信帖」を中心に  
大東文化大学大学院博士後期課程 金周會  
日本の書道史において、王羲之書法が奈良時代に盛んに受容されて以来、宮廷の書文化の礎を築いたことは周知の通りである。さらに平安時代にも引き続き愛好されたが、その代表的な遺品に空海筆「風信帖」がある。本発表では、「風信帖」の内容にまつわる人物と時代背景、さらに中国と日本との外交関係などを見据えながら「風信帖」と王羲之書法との関わりを考察する。

##### 〈会員による研究余話〉

##### 刻法と筆法の怪しい関係

大東文化大学教授 澤田雅弘  
一九九九年の拙稿「北魏墓誌の鐫刻について」(「大東書道研究」第七号)以来、北朝墓誌の刻に気が留めてきましたが、わからないことが増すばかりです。このたびは余話とこのことですので、現在進められている研究作業を含めて、鐫刻やその状態から考えられる工房、また特定の墓誌の刻について、分かったことや分からないことなど、整理をするつもりで、お話しさせていただこうと考えています。

◆「会員研究動向(18年度)」に関するお願い  
標記については、学会誌第十六号にてご依頼いたしました。会員各位には、ご発表の研究をご報告させていただきますよう、改めてお願いいたします。

記

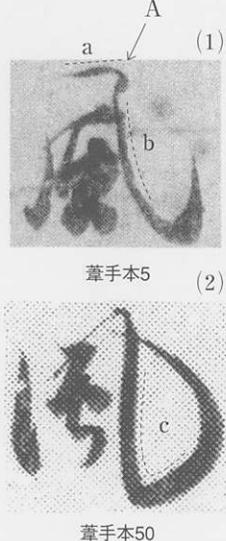
- 一、対象Ⅱ昨年度(二〇〇六年四月-二〇〇七年三月) 公刊した著書(学術書)、及び論文(学術誌、紀要、論文集、各種報告等に掲載されたもの)
- 二、内容Ⅱ氏名、書名または論文題名、出版社または所収誌(巻・号数明記)、刊行年月を記載してください(書式自由)
- 三、宛先ⅡFAX等にて副編集局長・菅野智明宛  
FAX 029-85312715  
Email: kanno@geijutsusukubae.jp
- 四、締切Ⅱ二〇〇七年六月末日
- 五、採否はご一任ください。ご報告分については、抜刷等の寄贈をお願いする場合があります。

(編集局)

〔訂正〕 会報No.12号に掲載した山本まり子氏の投稿「和漢朗詠集」葦手本と戊辰刻れについてに誤植等がありました。次のとおり訂正いたします。

中段12行目…「葦手本」↓「(2)では葦手本」、14行目…「(点線部a)」↓「(点線部c)」、下段4行目…「葦手本は」↓「削除、6-7行目…「なかるうか。(改行)それは」↓「なかるうか。それは」、注1…「小松茂美」↓「小松茂美氏」、注2「春名好重」↓「春名好重氏」、図(2)のキャプション…戊辰30↓戊辰330

また図版中の符号の欠落がありましたので、図(1)葦手本5と、図(2)葦手本50とを、次のように差し替えます



葦手本50

談話室

現代の拓工の名手いずこ

今成晴巳

近年、中国各地で出土した碑誌の拓本を購得する機会があるが、その拓法技術の低下には一抹の寂しさを感じる。

清朝の金石取藏家として名高い陳介祺などは、姚公符、劉守業といった拓工の名手達を食客として迎えていた位その採拓技術を重要視していた。家藏の于右任旧蔵「王弘墓誌」にも于氏の齋号のほかに「石儕」という朱文印一方が鈐されている。この石儕とは于右任詩「昭陵石馬歌」の詩中に出てくる楊石儕のことであり、彼は右任が民国期に洛陽で出土した墓誌の採拓を任せていた拓工の名手の一人であった。だが右任はこの時すでに採拓の名手がいなくなりつつあることを詩中で嘆いている。八十年を過ぎた今になっては更に名拓工の出現を期待するのは酷なことなのであるうか。

書の未来

谷口邦彦

昨年の第五回書法文化書法教育国際会議では、高校生・大学生企画を担当した。中でも日米学生シンポジウムは議論白熱し、圧倒されるほどの盛り上がりを見せた。「書に未来はあるか」という過激なテーマ設定が功を奏した格好。

日本側の学生は概ね「暗い」と捉え

ているのに対し米国側は楽観的で対照的。特に日本側学生四人の意見を聞きながら内心忪怩たるものがあつた。学生が「暗い」と感じるのには、我々の閉鎖性を敏感に察知してのことでは。もともと書はグローバルに馴染まないとの意見も頷けるが、今の時代そんなことを言つてはいられない。

會津八一・西川寧往復書簡

石井 健

日頃、日本の古代と近現代の書道史に興味を持ち研究を続けているが、昨年九月、早稲田大学會津八一記念博物館において「西川寧への手紙―會津八一西川寧往復書簡―」展が開催され、同展図録に往復書簡を通じて見た八一と寧の交流について記す機会を得た。

そのとき宿題となつたのが、いわゆる「會津八一日展審査員就任未遂事件」とでもいべき問題である。同展の開催により、これまで未発表だった西川寧宛八一書簡の内容が明らかになり、八一の日展不出品と審査員就任未遂を巡る問題の一端がおぼろげながら見えってきた。たいへん興味深く、折を見て一文にまとめてみようと思つている。

会員 動 静

○土橋靖子(会員) 平成19年度日展新審査員就任

○澤田雅弘(常任理事) 大東文化大学教授新任

○日賀野啄(会員) 大東文化大学専任講師新任

○高澤浩一(会員) 二松学舎大学専任講師新任

○横田恭三(常任理事) 跡見学園女子大学教授昇任

○柿木原くみ(幹事) 相模女子大学准教授昇任

編 集 後 記

◆勤務先のパソコンが故障し、メール等の閲覧は可能ですが返信ができません。仕事量とストレスが軽減され快調な日々。修理はもう少し先になりそうです。最近、書学研究者にとつて有用な拓本日録とは何かについて考えています。(小川博章)

◆東京国立博物館東洋館では、「槐安居中国碑帖コレクション」展が開催。大混雑のダ・ヴィンチ展とは別世界の第八室では、気品の漂う宋拓の碑帖に囲まれ、特別出陳の高島菊次郎翁の肖像画が慈愛に満ちた眼差しで迎えてくれる。(柿木原くみ)

◆世代交代の加速。学生たちにとって、またとないチャンスの到来かと思いきや、現場の声はまる逆。適任者不足で大あわて。かばん持ち時代の終焉。有能な後継者の育成を、真剣に見直すのも今だ。(笠嶋忠幸)

◆埼玉県大里郡妻沼町の大龍寺は、私の祖父父母が眠る亀田家の菩提寺であ

○信廣友江(会員) 安田女子大学教授昇任

○萩 信雄(会員) 安田女子大学教授昇任

計 報

○近藤康夫(会員) 18年10月10日死去 72歳

り、龜田鵬齋揮毫の庚申塔が建つ。この庚申塔の注目される点は、鵬齋四十九歳「ぎやう多」「くま可や」等の地名の仮名書きである。今回は良い拓が採れた。(亀田絵里香)

◆ヤフーオークションでは思いもかけない資料が続出。古典籍の基本台帳『国書総合目録』や国文学研究資料館ホームページにて公開の『日本古典籍総合目録』に未載の資料もあるからである。(高城)

◆中国(安徽省)在住の友人より「黄山八宝印泥」と印泥用の油が届いた。それらの製法について、文献等により興味をもっていたので尋ねてみたところ、「門外不出で、古来、長男にしか伝授しない」とのことであった。宜なる哉。文化の奥深さがここにもあつた。(山本まり子)

◆大学を移るにあたって、研究室に積もつた本を随分処分した。もう使わないと確信しながら、手放せずに連れてきた本もまだ多い。嬉しくもあり悲しくもある。(鳳)